

『雨月物語』に表れた畏怖・恐怖と倫理観

古屋 明子

一 はじめに

日本の近世の人々は、何を恐れ、それら畏怖・恐怖の対象に対してどのような思いを抱いていたのであろうか。また、それらの思いは、彼らの倫理観とどのように関係してくるのだろうか。これらを『雨月物語』という物語世界の中で追究していく。

『雨月物語』における怪異については、「怪談としての素材は人間の問題としてとらえられ、封建社会の桎梏に対する批判的感情が怪談素材の底にある魂の苦悶や執着をつかみ、『雨月物語』の凄絶な迫真力と詩情とを渾融させている」^①という封建社会への批判や、「理によって天地万物は説明し得ると考える朱子学の合理主義を否定する荻生徂徠から始まり、愛執・妄執に対する敬虔な畏怖が怪異への関心に転化し

た本居宣長の非合理主義、それに近いのが上田秋成の思想である」^②という人間の愛執・妄執の非合理性を表すなどと言われてきた。また、政治的な挫折が怨霊や執着に転化しない中国伝奇とは対照的に、その耽美性の影響を受けながらも、政治性の強い御霊信仰（共同体の論理）から抜け出て自我意識（近代的なそれではなく、共同体から孤立し新たな社会保証の得られない所に芽生えた自意識）・個の論理を運命的な人間状況にはむかう信条や「性」^③の必然として描く為の虚構である、とも言われている。

近世の怪談について、長島弘明氏は「諸国話、中国文献の邦訳・翻訳、百物語という三つの形式があるものの『はなし』として一貫している」「教化のために恐怖をおおるもの、笑いと表裏一体のもの等があるが結局一種の娯楽である」「法力やまじないは無効化されけ化け物も放置され救済のないまま終わる話には人間の生理的な部分にまで及ぶ怖さが

ある」「結局は人間が最も怖いというところに行き着き恐怖は外在するのでなく人間の内部にある」とする。^④一方、その表現について、森田喜郎氏は「漸増的怪異描写【吉備津の釜】【蛇性の姪】【白峯】、気づかれぬ怪異描写【浅茅が宿】【菊花の約】、予告された怪異描写【青頭巾】【仏法僧】【夢底の鯉魚】【貧福論】」の三つがあり、人間描写と情景描写とが三位一体となって巧みに描かれている」とする。^⑤

このように『雨月物語』と怪異については、登場人物やストーリー、語り、典拠や作者等から『雨月物語』の怪異を追究する先行研究は数多くある。^⑥しかし、『雨月物語』全話において畏怖や恐怖を表す古語に着目して、怪異の対象や内容からそこに表れた倫理観に言及したものは少ない。

そこで筆者の今までの研究を踏まえて、名詞では「罪」(二四例)、「ものけ・いきすだま」(六例)、「鬼」(一八例)、「おそろしさ」(六例)、「おそれ」(二例)、形容詞では「おそろし」(二〇例)、動詞では「かしこむ」(二例)、「かしまる」(四例)、「おそる」(一五例)、「おそろしがる」(一例)、「おづ」(一例)の各用例に着目してみた。その中でも、まず、「罪」という語と「白峯」「蛇性の姪」を取り上げそこに表れた儒教的倫理観について述べる。次に、「鬼」という語と「青頭巾」を取り上げ死肉を食らう説話的な「鬼」と禅思想について述べる。最後に、「おそろし」という語と「吉備津の釜」「蛇性の姪」「白峯」を取り上げ、秋成の『源

氏物語』引用の意図や語りの特色について述べる。そして、登場人物の思想や倫理観、語り方に言及しながら、秋成の思想とその背景を探っていきたいと考える。

二 「罪」に表れた儒教的倫理観

「罪」の用例(二四例)のうち二一例が会話の中で使われ、登場人物が罪を糾弾したり無実の罪を叫んだり等感情を込めた語として用いられている。それは物語の中で罪に対する共通認識と倫理観があるゆえとも考えられるので後に述べる。また、「罪」には(刑)罰の意味もあり、法的・宗教的・倫理的に何が罰に値すると考えられているのか、その背後の思想についても興味深いが、紙数の都合上今回は省略する。

一方、「罪」の用例は「白峯」(九例)と「蛇性の姪」(九例、国津罪一例)に多く、それぞれ特に天子としてのあり方と神宝の窃盗が問題視されている。

1. 「白峯」に表れた天子としてのあり方

「白峯」の典拠については、流布本『保元物語』の崇徳院の話・『撰集抄』慶安三年版本における西行の遍歴談・『本朝通紀』、「白峯寺縁記」・『四国遍礼霊場記』^⑧等が挙げられ、これらが「白峯」の構想を支え、数多くの文献から物語世界を構築していく秋成の手法が明らかにされている。

「白峯」は讃岐国の崇徳院陵の前で、天皇家や国家への崇りや平家の滅亡を予言する崇徳院の怨霊（以下、崇徳院と称す）と成仏を勧める歌僧西行とが対峙する話である。

万乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふもののおそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつづけて涙わき出づるがごとし。（巻之一 白峯 二七八頁）

讃岐国で崇徳院陵が荒廃したままになっていることを根拠に、僧である西行は「罪」を仏教的罪障ととらえ、崇徳院の前世の宿業に思いを馳せる。ところが、崇徳院の言う「罪」には儒教的思想が強く、ここでは徹底的に天子としてのあり方が問題視されている。

「汝聞け。（中略）罪もなきに、天帝の命を恐みて、三歳の體仁に代を禪りし心、人欲深きといふべからず。」（巻之一 白峯 二八一頁）

「（前略）人の徳をえらばずも、天が下の事を後宮にかたらし給ふは天帝の罪なりし。されど世にあらせ給ふほどは孝信をまもりて、勳業にも出さざりしを、崩させ給ひてはいつまでありなんと、武きころざしを發せしなり。臣として君を伐すら、天に應じ民の望にしたがへば、周八百年の創業となるものを。ましてしるべき位ある身にて、牝鶏の晨する代を取て代らんに、道を失ふといふべからず。汝家を出でて仏に姪し、未来解脱の利欲

を願ふ心より、人道をもて因果に引入れ、堯舜のをしへを釈門に混じて朕に説くや」と御声あららかに告せ給ふ。（巻之一 白峯 二八一頁）

崇徳院は天子としての過失はないと宣言し、父鳥羽院の命令に従い近衛帝に譲位した自分は私欲で動かず孝信を尽くしたにも関わらず、妃美福門院の子を次帝に決めた父帝こそ罪科がある。今の政治を天命に応え人民の望みに従う正道、つまり、徳による政治に戻すために自分は決起し、中国上代の聖天子の説く儒教は仏教より大切であると西行を一喝する。一方西行は、崇徳院は私利私欲を免れてはおらず、応神天皇の兄弟皇子が帝位を譲り合った心こそが中国の聖人の教えであり、だからこそ日本では儒教が王道の補佐となるという。

「（前略）我が国は天照すおほん神の開闢しろしめししより、日嗣の大王絶る事なきを、かく口賢しきをしへへ伝へなば、末の世に神孫を奪うて罪なしといふ敵も出べしと、八百よろづの神の悪ませ給うて、神風を起して船を覆し給ふと聞く。されば他国の聖の教も、この国土にふさはしからぬことすくなからず。」（巻之一 白峯 二八四頁）

次に西行は、天子を殺した仁義なき臣下を描いた書物『孟子』が日本に渡来しないのは、神々が風を吹かせて『孟子』を乗せた船を転覆させるからであり、日本にふさわしくない中国の聖人の教えも多いという。『孟子』積載の船が転覆す

るといふのは「五雜俎」(明の隨筆)卷四の記事である。この「罪」は、神孫から武力で帝位を奪うことを指す。

〔前略〕骨肉の愛をわすれ給ひ、あまさへ一院崩御給ひて、殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て宝祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを。〔卷之一

白峯 二八四頁)

更に、兄弟愛を忘れ天帝が亡くなってすぐに兄弟で帝位を争うのは「不孝の罪」であり、天下は神の定めた容器で私欲では得られないのが道理であるという。そして、仁徳で治めず道理に外れたやり方をするからこんな辺鄙な所の土となつたのであり、西行は崇徳院に浄土へ帰ることを勧める。西行の説く王道論は、武力で帝位を奪うのは道理に外れた「罪」であり、天子は儒教の仁徳や孝悌を大事にすべきであるというものである。『孟子』の放逐論(悪逆で帝位にふさわしくない君主を有徳の人物が討伐してよいとする思想)の否定や孝の思想は仏教者らしい発言であるものの、仁徳で治める天子という思想は儒教的要素が強いのではないか。この西行の主張に対して、崇徳院は自身の悲痛な心情を語り始める。

〔今、事を正して罪をとふ、ことわりなきにあらず。されどいかにせん。〕(卷之一 白峯 二八五頁)

この「罪」は天子としての間違つた心情や行為を示す。流

刑になり幽閉され参り仕える者もなく、帰京もかなわぬ。写経に歌を添えて贈つても、信西(藤原通憲、後白河帝の家臣)が呪詛だと上奏し送り返された。

〔前略〕いにしへより倭・漢土ともに、国をあらそひて兄弟敵となりし例は珍しからねど、罪深き事かなと思ふより、悪心懺悔の爲にとて写しぬる御経なるを、いかにささふる者ありとも、親しきを讓るべき令にもたがひて筆の跡だも納給はぬ叡慮こそ、今は旧しき讐なるかな。〔卷之一

白峯 二八六頁)

崇徳院は後白河帝に激しい憎悪を抱くに至るまでの経緯を事細かに語る。兄弟の敵対を罪深いと思つたがゆえの写経であると云つているので、この「罪」は仏教的罪障であるが、天子としてのあり方にも言及していると思われる。崇徳院も西行と同様、天子としての道理、あり方を問題にして「罪」という語を用いている。すなわち、天子として仁徳や孝悌に外れた心情や行動が「罪」であり、そこには儒教思想が根底にあると思われる。

この崇徳院と西行との思想上の対決は「白峯」で最も大きなテーマであり、「儒教」対「仏教」、あるいは「儒教」対「国学」と見なされてきた。加藤裕一氏は、『孟子』の易姓革命説(天は徳の高い者を天子として万民を治めさせ子孫相継ぐが、もしその家「姓」に不徳の者が出た場合は、「易」とする命をあらためて「革」他の家の者に変える「易」とする中

国古代の政治思想)は江戸初期家康の幕府正当化の理論書として活用されたが、江戸中期幕府の権力守成期になるとその重要度が失われ、また、契沖・真淵らにより体系づけられた国学の立場から、秋成は仏教側の西行と儒教側の院の双方を批判している^⑨、とする。また、野口武彦氏によると、『孟子』を道徳的理想主義(性善説や王道論)の書とみるか、易姓革命を説く革命理論の書とみるかは幕末に至るまで幕府にとってはデリケートにして重要な問題であった、ともいう。一方、高田衛氏は、西行の「ことわり」と崇徳院の「私憤」との対立であるとして、情念に憑かれ条理に反逆せざるを得ない崇徳院に美的価値を見出している^⑩。

ところで、江戸中期の国学者は、天皇制をどのようにとらえていたのであろうか。長島弘明氏によると、権力不保持の文化天皇制(禁中並公家諸法度)第十七条)という理念は同じだが、宣長が現実とは無縁の神話形而上学の理論(『秘本玉くしげ』、『玉くしげ』別巻)に終始していたのに比べて、秋成は史書(過去の歴史)から天皇の实在性と肉体的性(『雨月物語』「白峯」、『春雨物語』「血かたびら」)「天津をとめ」)を見ようとした^⑪、とする。

秋成が現実の天皇という人間を見つめていたのだとする^⑫と、「ことわり」を説く西行よりも、「私憤」を止められない元の天皇、崇徳院が格段の迫力をもって我々の胸に響いてきて、秋成の関心も崇徳院の方にあったのではないかと思われ

る。父院の生前はその命に従い、父院の天子としての過ちを正すために決起した自分は天子として仁徳や孝悌を大切にしてきた。流刑後、幽閉され家来もなく帰京も叶わず、兄弟の敵対という仏障を懺悔して静かに写経をし朝廷に送っても送り返され放置されたままである。『保元物語』(新編全集、陽明文庫蔵本)では、讃岐のしみじみとした情景とともに、崇徳院の和歌や書状に表れた辛い心情、望郷の思い、使者や朝廷とのやり取り、舌先を食い切り流れ出る血で書いた誓状を海に投げ入れるすさまじい様子等が詳細に描かれている。その全てを崇徳院の悲憤の言葉としてまとめ上げ、『保元物語』では後白河帝の忘恩を責めるだけなのに比べて、儒教思想に基づいた天子としてのあり方を、西行との会話で対比的に浮かび上がらせた所に秋成の独自性があるのではないか。秋成は、崇徳院に弟後白河帝憎悪に至る苦しい胸の内を語らせながら、天子としてのあり方だけでなく、人間の激しい情念や怨念を明確に描いている。そして、それは儒教的思想に基づき、読本作家としての秋成の姿勢の宣言が『雨月物語』の冒頭話「白峯」で行われているのである。

2. 「蛇性の姪」における神宝の窃盗

「こは何の罪ぞ」といふをも聞き入れず縛めぬ。(卷之四 蛇性の姪 三六八頁)

豊雄漸此の事を覺り、涙を流して、「おのれ更に盗をなさず。かうかうの事にて梟の何某の女が、前の夫の帯た

るなりとて得させしなり。今にもかの女召て、おのれが罪なき事を寛らせ給へ」。(巻之四 蛇性の姪 三六九頁)

真名子から太刀をもらっただけの豊雄は、訳が分からずに無実を訴える。

助も大宮司も妖怪のなせる事をさとりて、豊雄を責む事をゆるくす。されど当罪を免れず。守の館にわたされて牢裏に繋がる。大宅の父子多くの物を賄して罪を贖によりて、百日がほどに赦さるる事を得たり。(巻之四 蛇性の姪 三七一頁)

荒れ果てた邸にいる美女が消えた後に残された全ての神宝を見て妖怪の仕業であることが分かるが、豊雄は盗品所持の罪で投獄されてしまい、父や兄が多額の金品を贈つてようやく赦免される。

真名子入り来りて、「人々あやしみ給ひそ。吾夫の君な恐れ給ひそ。おのが心より罪に墮し奉る事の悲しさに、御有家もとめて、事の由縁をもかたり、御心放せさせ奉らんとて、御住家尋ねまゐらせしに、かひありてあひ見奉ることの喜しさよ。(後略)」

大和国石榴市の姉夫婦の家に身を寄せていた豊雄と再会した真名子は、豊雄を罪に陥れてしまったことを心から謝罪し、周囲をも信用させていく。これらの「罪」は全て神宝の太刀を盗んだことであり、重罪に値する。父や兄は漁師とい

う身分の家に太刀はふさわしくなく、だからこそ盗んできたとか考えられなかったり、一家断絶を防ぐために子を密告したり、賄賂を贈つて保釈させたり、物語世界の常識を体現する人物である。一方、豊雄は夢見がちで後先を考えずに美しい物を断り切れず、真名子は豊雄への謝罪の言葉で信頼を得ようとする。これらを見ると、「罪」という語がそれぞれの人物像や立場を明確にするように機能しているとも考えられる。ともかく、窃盗が重罪であることには、徳川幕府を支えた朱子学による上下の身分秩序や忠孝・礼儀を重んじる実践道徳を重視する思想的背景があったのである。

また、近世中期以後、主殺・親殺は死罪(火罪・磔・獄門等)であり、父母兄弟一族・妻子まで処罰される縁坐制であった。そのため、不孝の父殺しや神孫である天皇・主人への反逆を秋成が「天津罪・国津罪」「地祇に逆ぶ罪」「天の祟」巻之一白峯二八七頁)、「国津罪」巻之四蛇性の姪三六九頁)と考えていたらしいことは分かる。この他にも「罪」とされていることは、惑乱(「罪深き」巻之四蛇性の姪三六四頁)や愛欲(「鬼畜に墮罪し」巻之五青頭巾三九六頁)や無知(「罪」巻之五貧富論四〇五頁)である。

以上、「雨月物語」の「罪」という語に表れた内容を探ってきたが、ほとんどが会話の中で登場人物の強い心情を基に話され、その背景には儒教思想が強く表れている。「罪」の内容を述べながら、孔子の説く五徳(仁義礼智信)に朱子学

の忠孝悌を加えた、君臣・親子・夫婦それぞれの間で守るべき徳が熱く語られる。そして、徳治主義の王道政治が語られ、天子としてのあり方も明言されている。つまり、儒教思想に基づいた倫理観が語られていると言える。それと同時に、天皇を神孫と認め、神宝に対する畏敬の念を抱くという国学者の一面も見られる。

ところで、『雨月物語』の怪異出現の理由として「憤りを吐はき」(貧福論 四〇四頁)という語句が挙げられ(新編全集 頭注 四〇四頁)、秋成の胸中の不平や懷疑の心情を表す方法が怪異であったということもよく言われる。それと同時に『雨月物語』の計算し尽くされた構成や表現に言及する論も多い。秋成の巧みな語り口の術中にはまっているのかもしれないが、筆者は、儒教思想を用いて仁徳では語りきることができない人間の「性さが」に対する熱い思いをより効果的に描いているのではないかと考える。

三 「鬼」に表れた禅思想

「鬼オニ・モノ」の用例(二〇例)もほとんど(十八例)が会話の中で使われ、「罪」以上に人々の畏怖の感情のこもった言葉となっている。鬼が中心となって語られる「青頭巾」の用例(一二例)が最も多い。

1. 「白峯」「吉備津の釜」の死霊

〔前略〕鳥の頭は白くになるとも、都には還るべき期もあらねば、定て海畔うみべの鬼となるんざらん。(巻之一 白峯 二八五頁)

流され幽閉された自分は都へは二度と帰ることができず海辺の死霊となるしかないと嘆いた崇徳院の悲痛な心情が語られる。

陰陽師占べ考へていふ。「災すでに窮りて易からず。さきに女の命をうばひ、怨み猶尽ず。足下の命も旦夕にせまる。此の鬼、世をさりぬるは七日前なれば、今日より四十二日が間、戸を閉ておもき物齋すべし。我が禁しめを守らば九死を出でて全からんか。一時を過るともまぬがるべからず」(巻之三 吉備津の釜 三三五三頁)

陰陽師は死んだ磯良の怨霊が袖を殺し、正太郎の命もあわずかたと占う。

かの鬼も夜ごとに家を繞り或は屋の棟に叫びて、忿れる声夜ましにすぎまし。(巻之三 吉備津の釜 三五四頁)

陰陽師の占い通り、磯良の怨霊が每晚正太郎の家の周囲をめぐりながら怒り叫ぶ。これらの「鬼」は死者(崇徳院・磯良)の靈魂を明確に表している。

2. 「青頭巾」「浅茅が宿」「蛇性の姪」の怪異を起こすモノ(魍魎おに・妖怪「新編全集訳」)

一方、「鬼」をモノと呼び、怪異を起こす存在(仮に化け

物と呼ぶ)として扱われているものもある。

翁いふ。「(前略)一旦樹神こたまなどいふおそろしき鬼おにの栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはするぞ、老が物見たる中のあはれなりし。」(巻之二 浅茅が宿 三一九頁)

勝四郎が塚を築いて弔ってくれた老人に感謝すると、化け物の住みかとなった場所に宮木はけなげに待っていたと老人は言う。

快庵この物がたりを聞かせ給うて、「(前略)凡そ女の性かたまりの慳かたまりしきには、さる浅ましき鬼おににも化するなり。」(巻之五 青頭巾 三九三頁)

また、快庵禪師は女性にはねじ曲がった本性があるため、化け物に変身しやすいという。男性の例は珍しいのだがと言つて、山の僧が鬼になった事情に踏み込んでいく。また、オニと読むが怪異を起こす存在として扱われているものもある。

さては消息をすべきたづきもなし。家も兵火にや亡びなさん。妻も世に生てあらし。しからば古郷とても鬼の住む所なりとて、ここより又京に引きかへすに、近江の国に入りて、にはかにここちあしく、熱き病を憂ふ。(巻之二 浅茅が宿 三一〇頁)

勝四郎の心中が語られている地の文であるが、前々の用例と同様、勝四郎は故郷(下総国葛飾郡真間の郷)が戦火で焼

け失せ化け物の住む地になつてしまつたと嘆く。

金忠夫婦、「こは何ぞ」といへば、「かの鬼おにここに逐来る。あれに近寄給ふな」と隠れ惑ふを、人々「そはいづくに」と立ち騒ぐ。(巻之四 蛇性の姪 三七二頁)

石榴市で真名児・まろやに見つけられた豊雄が、化け物が追ってきたと隠れる場面である。

豊雄、漸人ごちして、「儂正しく人ならぬは、我捕はれて、武士らともいきて見れば、きのふにも似ず浅ましく荒果て、まことに鬼の住むべき宿に一人居るを、人々ら捕へんとすれば、忽ち青天霹靂はたかを震うて、跡かたなくかき消ぬるをまのあたり見つるに、又逐来りて何をかなす。すみやかに去れ」(巻之四 蛇性の姪 三七三頁)

日中に出現して姿形がはつきり見える自分は化け物ではないという真名児の言い分に耳を傾けてしまう豊雄は、化け物の住みそうな家に一人住みかき消えたと不信を露わにする。これらの「モノ・オニ」は怪異を起こすものとして語られている。

3. 「青頭巾」の死肉を食らう鬼畜

ところが「青頭巾」になると、鬼は人肉を食らう鬼畜として人々に恐れられている。

田畑よりかへる男等、黄昏にこの僧の立てるを見て、大きに怕れたるさまして、「山の鬼おにこそ来りたれ。人みな

（出でよ」と呼びののしる。（巻之五 青頭巾 三八八頁）
莊主かたりていふ。「さきに下等が御僧を見て鬼来りし
とおそれしもさるいはれの侍るなり。」（巻之五 青頭巾
三八九頁）

〔前略〕寺中の人々、「院主こそ鬼になり給ひつれ」と、
連忙逃さりぬるのちは、夜々里に下りて人を驚殺し、或
は墓をあばきて腥々しき屍を喫ふありさま、実に鬼とい
ふものは昔物がたりには聞きもしつれど、現にかくなり
給ふを見て侍れ。」（巻之五 青頭巾 三九一頁）

山の寺に住む高德の僧が越後から連れ帰った美少年を寵愛
して仏道修行を怠るようになっただけでなく病死した少年の
肉を食べ尽くし、毎夜村里に降りては人を襲い新墓をあばい
て死肉を食らう鬼になってしまったので、村人らは快庵禪師
を鬼の僧と見間違えたと農家の主人はいう。それを聞いた快
庵禪師は、人が鬼に化す理由を述べる。

快庵この物がたりを聞かせ給うて、「世には不可思議の
事もあるものかな。凡そ人とうまれて、仏菩薩の教の広
大なるをもしらず、愚なるまま、慳かたましきままに世を終る
ものは、其の愛欲邪念の業障に覆かれて、或は故の形をあ
らはして悲を報ひ、或は鬼となり蟒みづちとなりて祟りをなす
ためし、往古より今にいたるまで算ふるに尽しがたし。」

（巻之五 青頭巾 三九三頁）

快庵禪師は人が変化する原因は愛欲や邪心であるという。

これら「青頭巾」の鬼は、愛欲という邪心に捕らわれたがゆ
えに死肉を食らうようになってしまった元人間を指してい
る。死霊でもなく怪異を起こす化け物でもなく、道に迷った
元人間であるがゆえか、彼の鬼の僧に対するまなざしは優し
い。

〔前略〕さるにてもかの僧の鬼になりつるこそ、過去
の因縁にてぞあらめ。そも平生の行徳のかしこかりし
は、仏につかふる事に志誠を尽せしなれば、其の童児を
やしなはざらましかば、あはれよき法師なるべきもの
を。一たび愛欲の迷路に入りて、無明の業火の熾さかなるよ
り鬼と化したるも、ひとへに直ただくたくまましき性さがのなす所
なるぞかし。『心放せば妖魔となり、収むる則は仏果を
得る』とは、此の法師がためしなりける。老衲もしこの
鬼を教化して本源の心にかへらしめなば、こよひの饗あの
報うひともなりなんかし」とたふときこころざしを発し給
ふ。（巻之五 青頭巾 三九三頁）

山の僧が鬼になったのは前世からの約束事であり、その少
年と出会いさえしなければ高德の僧であったはずなのに、愛
欲ゆえに鬼になったのも別な見方をすれば、一途にまっすぐ
貫き通そうとする本性のせいであると快庵禪師は言う。それ
ならばもとの善心に立ち返らせるために鬼の僧を教化しよう
と快庵は誓う。

『雨月物語』においては男性の「直き」性は賞賛され、「女

の性の慳かたましき」(嫉妬等女性のねじ曲がった本性)は非難される。例えば、「浅茅が宿」の勝四郎の淡泊でまっすぐな気性や「蛇性の姪」の豊雄の優しく風流な気性は賞賛され、「吉備津の釜」の磯良の堪え忍ぶ女の燃え上がる嫉妬心や「蛇性の姪」の真名児の執念深さは非難されている。これら善悪を越えた人間把握は国学思想を土台としている(新編全集頭注 三九四頁) ようだが、国学者らは上代の思想「直し」を尊重し、『雨月物語』では良い本性を表すキーワードとして明示されている。この「直し」について、長島弘明氏は、真淵は善悪以前の白紙の状態を表すが、秋成はブラスのイメージを与え鬼僧は救済される、とする。その上、鬼の僧でさえ善心を取り戻す可能性があるような描き方がされている。

あるじの僧いふ。「我あさましうも人の肉を好めども、いまだ仏身の肉味をしらず。師はまことに仏なり。鬼畜のくらし眼をもて、活仏の来迎を見んとするとも、見ゆべからぬ理りなるかな。あなたふと」と頭を低て黙しける。禪師いふ。「里人のかたるを聞けば、汝一旦の愛欲に心神みだれしより、忽ち鬼畜に墮罪したるは、あさましとも哀しとも、ためしさへ希なる悪因なり。夜々里に出でて人を害するゆゑに、ちかき里人は安き心なし。我これを聞きて捨つるに忍びず。特来りて教化し本源の心にかへらしめんとするを、汝わがをしへを聞くや否

や」。(巻之五 青頭巾 三九六頁)

ここでは死肉を食らう鬼は「鬼畜」とまで表されている。ひもじいなら私を食えという快庵禪師に、自分のような鬼畜の濁った目には尊いあなたは見えないと鬼の僧はうなだれる。自身を鬼畜と呼ぶ鬼の僧は悪業を自覚しており、善心に戻したいと願う高德の快庵禪師のおかげで、鬼畜になりはてても一年間証道歌を唱え続けた山の僧は善心を取り戻し成仏する。

『雨月物語』で人を食らう「鬼」は元は人間で鬼になった因縁があり、禪宗の力で人間の良き心を取り戻す様が描かれている。また、「青頭巾」の典拠として『和語連珠集』(宝永元「一七〇四」年、拳扇堂静栄著の随筆) 第三「食人鬼」や『五雑俎』(明末「一六一九年」、謝肇淛著の随筆。明代の政治・経済・文化・科学などを、天・地・人・事・物の5類に分けて考証したもの)が挙げられるが話の骨格は独自のもの⁽¹⁶⁾であるとも言われている。そして、以前この作品は禅思想の具現化⁽¹⁷⁾、禅宗による救済であると見られてきた。その後、救済説・非救済説が様々に論じられたが、近年は女の「慳しき性」⁽¹⁸⁾との対比で語られている「直くたくましき性」の意味を問うべきことが言われている。そう考えると、やはりここでも、今度は禅思想を背景にして人間の本性を追究していく秋成の姿勢が見られる。

四 「おそろし」の語りに見られる臨場感

1. 「おそろし」について

形容詞「おそろし」(二〇例)のうち地の文(心中語も含む)は一一例、会話文は九例ある。会話文に目を向けると、豊雄や祈禱僧が真名児(大蛇)に対して「あな、恐し」と叫ぶ声や豊雄や金忠夫婦が真名児を「恐ろし」と語る言葉には、その前の真名児・まろやの出現と相まって臨場感があり、畏怖・恐怖が読者に迫ってくる。

(1) 死霊の声

其の夜三更の比おそろしきこゑして「あなにくや。ここにたふとき符文を設つるよ」とつぶやきて復び声なけぬるに生出でて、急ぎ彦六が方の壁を敲きて夜の事をかたる。彦六もはじめて陰陽師が詞を奇なりとして、おのれも其の夜は寝ずして三更の比を待ちくれば。松ぶく風物を僵すがごとく、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに、壁を隔て声をかけあひ、既に四更にいたる。下屋の窓の紙にさと赤き光さして、「あな悪やここにも貼つるよ」といふ声、深き夜にはいとと凄しく、髪も生毛もことごとく聳立て、しばらくは死に入りたり。(巻之三)

吉備津の釜 三五四頁)

お札のせいで入ることができないという恐ろしい声が真夜

中に響き渡る。それを聞いた彦六も初めて陰陽師の言葉を信じて正太郎とともに真夜中を待つ。この「松ぶく風」は『源氏物語』夕顔巻から引かれている(新編全集頭注 三五四頁)ようだが、風・雨・夜の中で励まし合いながらも、正太郎と彦六は死霊磯良の赤い光と一際恐ろしい声に、身の毛もよだち気を失ってしまう。「おそろしき」「おそろしさ」「髪も生毛もことごとく聳立」と正太郎の心情や様子が時の経過とともに畳みかけるように語られることにより、死霊が声をあげながら家の周りを執念深く回っている様子が思い浮かべられ、畏怖・恐怖の度合いが高まる。

(2) 窃盗罪と一家断絶

発言に表れた畏怖・恐怖でも、太郎の場合は神宝への畏怖、窃盗の疑い・一家断絶への恐怖である。

刀自やがて携へ来るを、よくよく見をはりて、長嘘をつぎつつもいふは、「ここに恐しき事あり。近来都の大臣殿の御願の事みたしめ給ひて、権現におほくの宝を奉り給ふ。さるに此の神宝ども、御宝蔵のなかにて頓に失しとて、大宮司より国の守に訴出で給ふ。

(巻之四 蛇性の姪 三六七頁)

「かうかうの恐しき事あなるは、いかが計らひ申さん」

(巻之四 蛇性の姪 三六八頁)

豊雄の太刀を妻に持ってこさせた太郎は、そのきらびやかな太刀は神宝の盗品ではないかと疑い、父に知らせる。家の

断絶を防ぐために、父は国司の役所に訴えて豊雄を捕らえさせる。儒教思想を背景にした家父長制度の中で、太郎や父は家の存続を至上とする法の遵守を体現する人物である。これらの「おそろし」は窃盗罪と盗人を家から出したことに對する恐怖である。

(3) 死霊の予言

一方地の文で語られる「おそろし」には、死霊とその予言に對する畏怖が見られる。

まさしく「円位、円位」とよぶ声す。眼をひらきてすかし見れば、其の形異なる人の、背高く瘦おとろへたるが、顔のかたち、着たる衣の色紋も見えて、こなたにむかひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、恐ろしともなくて、「ここに來たるは誰ぞ」と答ふ。(卷之一)

白峯 二七九頁)

法名で呼びかける死霊も恐ろしいが、深く仏道に帰依した西行は恐れないと語ること、その法力や落ち着きが強調される。一方、死霊の声や容貌は格別に恐ろしい。

(前略) 只清盛が人果大にして、親族氏族ごとごとく高き官位につらなり、おのがままなる国政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故いまだ期いたらず。汝見よ。平氏も又久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終に報ふべきぞ」と、御声いやましに恐しく聞えけり。

(卷之一 白峯 二八八頁)

自分に反旗を翻した者はことごとく死に至らしめ、平清盛は今では忠義の息子重盛に守られているがいずれ平家を亡ぼし、後白河帝にも必ず報復すると叫ぶ崇徳院の呪詛の声は、西行にも更に恐ろしく聞こえる。

光の中につらつら御気色を見たてまつるに、朱をそそぎたる竜顔に、荊の髪、膝にかかるとまで乱れ、白眼を吊あげ、熱き嘘をくるしげにつがせ給ふ。御衣は柿色のいたうすすびたるに、手足の爪は獸のごとく生のびて、さながら魔王の形、あさましくもおそろし。(卷之一 白峯

二八八頁)

憤怒で真っ赤になった顔、長いざんばら髪、つり上がった白目、苦しそうな熱い吐息、修験者の衣、鋭く長い獸のような爪の崇徳院の容貌に、さすがの西行も畏怖・恐怖をおぼえる。

その後十三年を経て治承三年の秋、平の重盛病に係りて世を逝ぬれば、(中略)頼朝東風に競ひおこり、義仲北雪をはらうて出づるに及び、平氏の一門ごとごとく西の海に漂ひ、遂に讃岐の海志戸、八島にいたりて、武きつはものどもおほく鼈魚のはらに葬られ、赤間が関、壇の浦にせまりて、幼主海に入らせたまへば、軍將たちものこりなく亡びしまで、露たがはざりしぞ、おそろしくもあやしき話柄なりけり。(卷之一 白峯 二九〇頁)

そして、崇徳院の呪詛は全てその通りになったことに對し

て、畏怖・恐怖が驚きとともに語られる。これら地の文における「おそろし」は、西行の視点や語り手の視点で語られるものの、その語り口の臨場感は史実を知っている読者の想像力をかき立て、圧倒的な迫力で受け取られたと考える。

(4) 人心や世の中の荒廃

また、人心や世の中の荒廃も「おそろし」とされている。

世の中騒がしきにつれて、人の心も恐しくなりになり。(卷之二 浅茅が宿 三〇九頁)

妻涙をとどめて、「一たび離れまゐらせて後、たの

むの秋より前に恐しき世の中となりて、里人は皆家を捨てて海に漂ひ山に隠れば、適残りたる人は、多く虎

狼の心ありて、かく寡となりしを便りよしとや、言を

巧みていざなへども玉と碎ても瓦の全きにはならはじ

ものをと、幾たびか辛苦を忍びぬる。(卷之二 浅茅

が宿 三一四頁)

勝四郎が家の再興のために京都へ発った後、関東一帯は戦乱となり、人心も世の中も荒廃してしまった。美しい宮木に言い寄る男もいたが彼女は「三貞の賢き操」を守り抜いた。

これらの「恐ろし」は、戦禍の荒廃を示す形式的な言い方とも言えるし、宮木の勝四郎への貞節を強調する効果があるとも言える。

『源氏物語』の「おそろし」には「そらおそろし・空もおそろし・けおそろし」「おそろしげなり」と派生語が多く、

それらを書き分けることよって各登場人物の心情を語り分けているところに特色がある¹⁹⁾。一方、『雨月物語』の「おそろし」には派生語は少ないが、会話文であれ地の文であれ「おそろし」と表すことでその前の描写がより生き生きとして、登場人物の心情や人物像が強調され、読者の想像力をかき立てる効果があると考ええる。秋成が「浅茅が宿」「吉備津の釜」「蛇性の姪」において『源氏物語』の文章、王朝語を用いながら効果的な怪異描写を行っていることはよく指摘されている。人間の「性」にこだわる秋成が『源氏物語』の怪異描写を背景に、「おそろし」という語だけを意図的に選択して、その前後の文とともに臨場感あふれる独自の怪異描写を生み出しているのではないかと考える。

2. 「おそろしさ・おそれ」について

名詞「おそろしさ(七例)・おそれ(二例)」に目を向けてみると、九例中地の文が七例であり、これもまた客観的に読者に印象づけるように機能しているのではないかと思われる。その対象も豊臣秀次主従(「仏法僧」)、磯良とその指先、残された男の髻というように、死霊の様子だけではなく死霊が何を行ったかを読者に想像させる手法を用いて、畏怖・恐怖の度合を一気に高めている。死霊に直接対面している夢然親子(「仏法僧」)や正太郎、髻を眺める彦六の畏怖・恐怖がそのまま、いや物語の全てを知る読者にとってはその以上に伝わってくる。「おそろしさ・おそれ」と語り直され

ることで、人間の力ではどうにもできない死霊の威力を再認識させる効果があると考ええる。

3. 「かしこむ・かしこまる・おそる・おそろしがる・おづ」について

「かしこむ」(二例) 対象は崇徳帝と鳥羽院、「かしこまる」(四例) 対象は豊臣秀次、豊雄、次官であり、天子と閑白らでは動詞が使い分けられているようにも思われるが、『雨月物語』では貴人として尊ばれている人物が以上のように五人いる。また、「おそろしがる」(一例) 対象は山の人食い鬼、「おづ」(一例) の対象は外見が富子で声が真名児の物の怪である。そこで、「おそる」を中心に述べる。「おそる」(一五例) のうち地の文は一一例で、会話文が四例であり、客観的に語る際に用いられる語である傾向が強い。「おそる」の対象は、崇徳院、豊臣秀次、真名児からの求婚・生臭い風・執念深さ、山の鬼というどれも死霊である。そこでここでは、「おそるおそる」という表現に注目する。

法師夢然にむかひ、「前によみつる詞を公に申し上げよ」といふ。夢然恐るおそる、「何をか申しつる更に覺え侍らず。只赦し給はれ」(卷之三 仏法僧 三三九頁) 豊臣秀次と親しい連歌師里村紹巴ぜうはが、先ほど夢然が詠んだ今風の誹諧の一句を秀次公に申し上げよと詰め寄る場面である。夢然は恐れおののきながら辞退するものの、結局「頭に髪あらばふとるべきばかりに凄まじく」と強烈な恐怖を抱き

ながら句を書き付けて差し出す。

いかになりつるやと、あるいは異しみ、或は恐るおそる、ともし火を挑げてここかしこを見廻るに、明けたる戸腋の壁に腥々しき血濯ぎ流て地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にものあり。ともし火を捧げて照し見るに、男の髪の髻ばかりかかりて、外には露ばかりのものもなし。浅ましくもおそろしさは筆につくすべうもあらずなん。(卷之三 吉備津の釜 三五五頁)

正太郎の叫び声を聞いて彦六が表に出てみると、夜は明けではおらず、正太郎はどこにも見当たらない。恐れおののきながら灯火をかかげてあちこち見て回ると、戸の脇の壁になまましい血がべったりついている。しかし、死体も骨もない。さらに照らして見ると軒の端に男の髪の髻もとどりが下がっているだけであった。彦六の目線に添って読んでいく読者の恐怖と戦慄は、「髻ばかりかかりて」の想像を絶する凄まじさに最高潮に達す。

此の床の上に輝々しき物あり。人々恐る恐るいきて見るに、豹錦、呉の綾、倭文、縑、楯、槍、鞆、鍬の類、此の失つる神宝なりき。(卷之四 蛇性の姪 三七二頁) 豊雄の言うとおりに武士らが真名児の家に行くとき彼女は忽然と消え失せたので、床の上にあるきらきらする物に恐れおののきながら近づいてみると、失くなった神宝であった。

これらの「おそるおそる」という動詞の繰り返しは、登場人物の目線で見つかるものをびくびくどきどきしながら想像し探していく読者にとって、登場人物の心情も追体験させられている語であると言える。

五 おわりに

秋成の用いる語句の独自性についてはよく指摘されているが、「罪」という語においても、典拠とは違ってそれが随所に使われることでその儒教思想がよく表されている。特に、「地祇に逆ふ罪」や「国津罪」という語をあえて用いることで、その神道思想も伺うことができる。また、「鬼」の改心には禅思想も見られる。特に、「もののけ」では人間関係に基づき用いる漢字や読み方が書き分けられている。そして、『源氏物語』を踏まえての「おそろし」には登場人物の心情が豊かに表現されている。

『雨月物語』は怪異譚であるので、「罪」「鬼」「もののけ」「おそろしさ・おそれ」「おそろし」「おそる」それぞれに表れた畏怖・恐怖の対象は人知の及ばない生霊・死霊である。しかし、これらの語を用いて、読者の想像力をかき立てながら恐怖や戦慄を感じさせる手法は見事としか言いようがない。計算し尽くされた緻密な構成の妙が随所に見受けられる。これらの語に表れた倫理観の中心は儒教思想であるが、天

子としてのあり方に対する批判精神も明らかに見られる。上田秋成は、青年期には陽明学の影響を受け、加藤宇万伎への師事後に真淵国学に傾倒し、朱子学が再び儒学の本流となった時代に壮年期を過ごしていた²⁰。

その中で秋成は、儒教でも仏教でも個人が心の素養として受容する時は肯定的に受け止めたが、「智略の術」として利用される場合は激しく非難した²¹。また、『国意考』における真淵の儒仏批判と秋成のそれとは本質を異にし、『雨月物語』の「白峯」「菊花の約」や「貧富論」「青頭巾」には儒仏肯定が見られるとも言われている。

上代の「直き」心をよしとする江戸期の国学者において、契沖や荷田春満、賀茂真淵、本居宣長がそれぞれ『万葉集』や『古事記』等の古典研究に励んだ一方で、上田秋成は中古の和歌集や物語にもこだわり、怪異という手法を用いて『雨月物語』の中で「直き」心等男女それぞれの良き悪き「性」²²を表現しようとしたのであると考える。『雨月物語』刊行の三年後に著した、虚構の体裁を取った秋成の源氏物語論『ぬば玉の巻』でも、恋愛における女性の「めくしき」態度、すなわち、才気走らず時と場所に適した対応ができること、風流ぶらず言葉に色艶のあることが称揚されている。

『雨月物語』には、儒教、特に朱子学の思想に基づいた倫理観が前面に出されながら、そこに収まりきらない人間性を描くことを通して儒教倫理に対する批判的な姿勢も表されて

いる。徳川幕府政策の一つとして社会通念である朱子学による正邪をよしとしながら、人間の「直き」「心や良き」「性」、そこに収まりきれない悪き「性」をも認めざるを得ないとする倫理観が『雨月物語』には表されていると考える次第である。

* 『雨月物語』本文は新編日本古典文学全集による。

* 『秋山記』本文は上田秋成全集による。

注

- 1 高田衛「秋成との出会い(一)(二)」(『定本上田秋成研究序説』国書刊行会 二〇一二年)
- 2 日野龍夫「怪異を信じたがった人々」(日野龍夫著作集第二巻『宣長・秋成・蕪村』ペリかん社 二〇〇五年)
- 3 森山重雄「伝奇の思想」(日本文学研究資料叢書『秋成』有精堂 一九七二年)
- 4 高田衛・小松和彦・長島弘明「鼎談・江戸の怪異譚と西鶴」(『西鶴と浮世草子研究 Vol. 2』笠間書院 二〇〇七年)
- 5 森田喜郎『雨月物語』における怪異描写(『上田秋成の研究』笠間書院 一九七九年)
- 6 井上泰至「研究史概説」(秋成研究会編『上田秋成研究事典』笠間書院 二〇一六年)
- 7 若木太一「白峯」の造型 典拠からの遡源——(『近世文藝』三二号 一九八〇年三月)
- 8 小山一成『雨月物語』(白峯)と「白峯寺縁記」および「四国偏礼霊場記」(『立正大学国語国文』第一一号 一九七五年三月)
- 9 加藤裕一「白峯」試論(『上田秋成の思想と文学』笠間書院 二〇〇九年、初出は「国文学 言語と文芸」七四号 一九七一年一月)
- 10 野口武彦「王道と革命の間——江戸朱子学は『孟子』をどう受け入れたか」(大東文化大学日本文学科「文学」四四巻七号 一九七六年七月)
- 11 高田衛「怪談の思想——『雨月物語』の美学——」(『定本 上田秋成研究序説』国書刊行会二〇一二年、初出は『上田秋成研究序説』寧楽書房 一九六八年)
- 12 長島弘明「秋成と天皇」(『秋成研究』東京大学出版会 二〇〇〇年)
- 13 石井良助「刑罰の歴史(日本)」(法律学大系第二部『法学理論篇』日本評論社 一九五〇年) 近世
- 14 前田勉「近世日本における天皇權威の浮上の理由」(『近世神道と国学』ペリかん社 二〇〇二年)
- 15 長島弘明「上田秋成・雨月物語」(新潮古典アルバム『上田秋成』新潮社 一九九一年)
- 16 浅野三平「青頭巾をめぐって」(『上田秋成の研究』桜楓社 一九八五年、初出は「国文目白」一九号 一九八〇年二月)
- 17 鷺山樹心「雨月物語「青頭巾」と禪思想」(花園大学「国文学論究」第六号 一九七八年一月)
- 18 風間誠史「青頭巾」をめぐって(日本文学協会近世部会「近世部会誌」第六号 二〇一二年三月)
- 19 古屋明子「源氏物語」に表れた畏怖・恐怖と倫理観(『大東

- 文化大学紀要「第六二号（人文科学）二〇二四年二月）
蕭碧盞「江戸小説と漢学―加藤宇万伎と秋成とのかかわり―」
（淡江大学「淡江日本論叢」第八号 一九九九年三月）
- 20
杜洋「国学者上田秋成の儒仏観―史論『遠駝延五登』を中心
に―」（東京大学比較文学・文化研究会「比較文学・文化論集」
第二六号 二〇〇九年三月）
- 21
鷺山樹心「雨月物語と儒・仏二教」（花園大学「国文学論究」
第五号 一九七八年三月）
- 22